

## 広隆寺について



楼門

( <https://kanko.city.kyoto.lg.jp/detail.php?InforKindCode=1&ManageCode=1000064> による)

広隆寺のことを知るには、[甲斐健という人の作成したホームページ](#)をまず見て欲しい。広隆寺の概略を知ることができる。

その上で、「旅好きのオジさん」という人が作成した「このたびのたび」という膨大なホームページの中に、[広隆寺に関するホームページ](#)があるので、それを見て欲しい。国宝・阿弥陀如来像、秦河勝夫妻神像、聖徳太子像、国宝・弥勒菩薩などが公式パンフレットから転載されているので、その素晴らしい写真を見ることができる。

さて、[京都市産業観光局観光MICE推進室](#)の作成した[公式ホームページ](#)によると、広隆寺について次のように説明している。

秦河勝が聖徳太子から賜った仏像を本尊として建立した京都最古の寺。

その本尊が国宝指定第1号の弥勒菩薩像。  
桂宮院（国宝）は法隆寺の夢殿に似た単層八角円堂。

建立：603年（飛鳥時代）

まことに要領を得た説明である。しかし、秦河勝という人はどういう人物なのか、なぜ聖徳太子から仏像を賜ったのか、京都最古の寺というのはどういうことなのか、それらがわからない。そこで私は、それらの説明を含めて広隆寺建立の経緯を説明したい。

現在の広隆寺は太秦にあり、太秦広隆寺とも呼ばれる。太秦といっても広いので、厳密に言えば、太秦蜂岡である。私が4年生まで通っていたやすい小学校は、太秦安井であり、秦氏の建立した蚕ノ社は太秦森ヶ西町である。小学生の頃よく蚕ノ社で遊んだ。

現在の広隆寺は、平安遷都にあたり、損野（かどの）から移転したものであり、元の広隆寺は損野広隆寺と呼ぶのがいい。損野は現在の白梅町付近（北野神社の少し西）である。そこに秦河勝が建立したのである。秦河勝はそこに住んでいたわけではない。秦一族の根拠地は、古墳などの遺跡から考えて、太秦蜂岡付近であったに違いない。もちろん、秦河勝は聖徳太子の側近であったので、聖徳太子の住まう斑鳩に住んでいたと思われるが、時々太秦蜂岡に帰ってきたであろう。

しかし、蘇我入鹿の迫害が及んでくることをひしと感じた秦河勝は身の危険を避けるために太秦をはなれ、ひそかに孤舟に身をゆだねて西播磨にのがれ、秦氏がつちかった土地に隠棲した。したがって、それからは太秦に帰ることはなかった。それでも、太秦が秦一族の根拠地であることは変わらず、秦氏は山背（やましる）の地方豪族として、平安遷都に尽力するのである。

広隆寺は秦氏の氏寺である。上述したように、元の広隆寺は、平安遷都以前から存在したものである。通常、平安遷都以前から存在した寺というのは、元の広隆寺と六角堂と法観寺と言われている。

しかし、六角堂はもっと新しいものらしい。六角堂の創建は縁起類では飛鳥時代とされているが、1974年から翌年にかけて実施された発掘調査の結果、飛鳥時代の遺構は検出されず、実際の創建は10世紀後半頃と推定されているのである。

法観寺については、伝承によれば五重塔は592年に聖徳太子が如意輪観音の夢告により建てたとされ、その際仏舍利を三粒を収めて法観寺と号したという。しかし、その伝承は疑

わしい。聖徳太子創建の伝承は信憑性に疑いがあるものの、平安遷都以前から存在した古い寺院であることは確かとされており、朝鮮半島系の渡来氏族・八坂氏の氏寺として創建されたという見方が有力である。そして、境内から出土する瓦の様式から、その創建は7世紀にさかのぼるとみられている。

このように、法観寺もその創建は平安遷都の頃には存在していた可能性が高い。そうだとすれば、平安遷都の際になぜ取り壊されなかったかということを考えねばならない。というのは、桓武天皇は平安京に東寺と西寺以外の寺を認めなかったからである。法観寺が平安京にあるとすれば取り壊されたはずである。しかし、取り壊されなかった。これはどういうことか？

当時、平安京という都の範囲は、西は北大路から東は寺町通までであり、法観寺のある八坂はそれから外れている。そのために、法観寺は取り壊されずに済んだのではないか。あるいは、法観寺が聖徳太子ゆかりの寺であったからかもしれない。いずれにしろ、法観寺は残った。

元の法隆寺も法観寺も共に聖徳太子ゆかりの寺であるが、私は、この二つの寺が平安遷都以前から存在したと考えている。したがって、「広隆寺は、秦河勝が聖徳太子から賜った仏像を本尊として建立した京都最古の寺」だという京都市の説明を「広隆寺は、平安遷都以前から存在した、京都最古の寺と考えられているものの一つである」と言い換えた。

